

フロイト、アドラー、ユングから見た交流分析

～統合的心理療法としてのTAを目ざす第一歩として～

目次

1. はじめに	1
2. 心の動き	2
3. 人生脚本	5
4. 男と女の交流	8
5. 夢の意義	11

1. はじめに

フロイトを元祖とする精神分析、アドラーの個人心理学、ユングの分析心理学の三種類の深層心理学は、次の3点で同一平面に立っている。

1. 人間の心の生活を考察するに際して無意識の働きを非常に重く見る
2. 連想実験と夢分析とに基礎を置く方法（この方法によって無意識の心の動きを意識のはじめに面に引き出してくる）
3. 心の営みは因果律の厳密な支配下にある

という3つの点で同一の平面に立っている。しかしさまざまな認識、帰結、配列、評価では大きな相違を見せる

I. 無意識とノイローゼ（フロイト）

a. 無意識とは

- ・ある時点で、意識的に気づくことができない心的内容を示す言葉。
- ・心には通常では意識されない部分があり、それが本人にも気づかぬ時に現れて、思わぬ行動を起こしたり、心身の症状を起こしたりする。
- ・フロイトは、この人間の心の中の意識されない部分を無意識と呼んだ（個人的無意識）。

b. 無意識とノイローゼ

- ・意識にとって都合の悪いものが**抑圧**されてどんどん膨れ上がってその力を超えると、次第に意識の領域を脅かすようになる。この意識が脅かされた状態がノイローゼ。

c. ノイローゼを治すには

- ・無意識という闇の領域に意識の光を当てて、抑圧されていたものを意識化すればよい。そうすれば精神の安定を保つことができる。

II. アドラーと無意識

- ・アドラー心理学はフロイトの精神分析学とは理論的にも技法的にも異なる。
- ・古典的精神分析や来談者中心療法との共通点も少ない。
- ・フロイトは抑圧が無意識を作り出す原因としたが、アドラーは抑圧を心の諸手段中の一手段にすぎないとする。

III. フロイト、アドラー、ユング

a. ユングはフロイト、アドラー、因果論的見方と目的論的見方の統合を志した。

b. ユングは人間の心の活動には4つのレベルがあると考えた。

- 1) 個人的意識
- 2) 個人的無意識
- 3) 集合的意識
- 4) 集合的無意識

2. 心の動き

I.フロイト, S. (1856-1939)

1. **無意識的**観念の確立—— 科学の対象としてはじめてとり上げられる。
 - ・「我々にはそれと認められないが、ある種の症状や証拠に基づいてその存在を承認したいと考えざるを得ないような」観念
 - ・「意識的ではない、はっきりそれと知覚されるような形では自我とつながりを持っていないあらゆる心的内容ないしは心的過程の総称」
 - ・前意識、本来の無意識、自我の無意識的部分の3つからなる。
2. 物事を**因果的**にとらえる
 - ・個人の行動は快感を求め、不快感を避けようとする衝動によって導かれる。
 - ・症状をその原因に還元する。原因はいつも衝動抑圧。
 - ・心的葛藤は快楽原則と現実原則の相克から生じる。相剋の原因は抑圧。
 - ・病的葛藤は性欲衝動と自我衝動との間の葛藤。
3. 精神分析
 - ・人間の心を研究する方法。
 - ・患者理解の基本的な方法：自由連想法とそれに伴う観察。
 - ・治療者の使命は神経症の出発点である心的葛藤をその原因に還元することにある。
 - ・「エスあるところにエゴ（自我）あらしめよ」（交流分析：Aの汚染解除）
4. 性欲の理論
 - ・人間の発達は**性衝動**のエネルギーに対抗して、自分を貫徹していくことと密接に関連している（フロイトはリビドーという言葉を使っている）。

幼児性欲とは：

 - ・性の衝動が幼年期に欠けており、思春期にはじめて目覚めるという通俗的な認識は間違っている。
 - ・幼児の行動を観察すると3歳以後、性欲的であることはとは明らかである。その「性欲的」は性交衝動という狭い意味ではない。
 - ・幼児性欲の根本性格は「種々雑多な快感の獲得」という点にある。
5. 意識の無意識に対する**抵抗**
 - ・無意識はそのままでは意識の面に浮かび上がってくる力を持たない。
 - ・**抑圧**：ある衝動は意識の支配する社会共同生活から無意識の世界に追放される。
 - ・二通りの無意識
 - 1) 潜在的だが意識の舞台に登場可能な無意識（前意識）。
 - 2) 抑圧されて、それだけでは意識の舞台に登場不可能な無意識（狭義）。
 - ・無意識世界は人類の原始時代の世界、個人の幼児時代の世界といえる。
 - ・フロイト：抑圧が無意識を作り出す原因。無意識は根本的には一個の「悪」

II. アドラー, A. (1870-1937)

1. フロイトからの離反

- ・1902年、フロイトの研究会に参加するようになり、初期の熱心な弟子の一人となる。
- ・1911年、フロイトのリビドー理念に異を唱え、脱退し、自由精神分析家グループを作り「個人心理学」への道を歩み始める。

2. 万事を目的論的にとらえる

- ・人間理解：すべての心的現象は何らかの目的のための準備（原因を考えない）。
- ・心は統一された源泉から来て統一された目標に向けられて動く力。
- ・心的疾患はある一定の究極的目的を志向している。目的は他人より優越した立場に立つとうという「権力への意志」から出たもの（優越願望、権勢欲）。
- ・批判：一切の人間の衝動を権力原理の下に従属させる？

3. 劣等感と優越感：

- ・フロイトと対照的：幼児の無力感の体験がセックスと同じくらい重要。
- ・身体器官の劣等性に着目し、これが人間を行動に駆り立てる真の動因となる。
- ・優越という目標は人間に本源的な「劣等感情」から補償的に生じて来たもの。
- ・劣等感の克服→ 幼児：「大人を負かしてやるぞ」→（未来の世界での優越空想）。
- ・神経質な性格は病気そのものを「空想的優越」という目的実現のために計画的に利用する

例. 不眠症、頭痛：対人感情のストレスが原因で、症状がその結果とは考えない。

4. 独自の目的論的心理学への発展

- ・劣等感よりも目的追求性が理論の中核になる。
- ・J. ビーラー（九大講演）：「劣等感はアドラーの理論の一部にすぎず、一番基本的な考えは“隣人を愛すること”だった」「治療者は神ではなく友達」
- ・人間には生得的な社会的な関心がある。人間が抱えるすべての問題は社会的問題。
- ・パーソナリティの成長において中心的役割を果たすのは対人関係である。
- ・アドラー心理学で解決できるのは対人関係の問題で身体的問題ではない。

5. 共同生活感情（“社会の中の人間”、社会的同一性）

- ・患者を真に理解するには、日常から患者と接触して生活の面でも知っておく必要がある。1920年に家族療法を始める。地域精神医学の元祖。
- ・問題：対人関係への関心に薄さ→ 共同生活を目ざした根本態度の受け入れ。

例. 東北大震災の復興：劣等感を持つ若者が社会支援（共同生活）で“自分がどれだけ役立つか”と「社会の中の私」を探求している。

用語 補償

アドラー：劣等感を克服して自らの弱点を補おうとする心の働き

ユング：心的器官の自己調節作用の全てを指すもの

III. ユング, C. G. (1875–1961)

1. フロイトとの離反

- ・1907年にフロイトに会い、1911年に国際精神分析協会の初代会長に就任。
- ・1914年までにフロイトとの見解がかけ離れてきたため、2人の関係は断たれた。

2. 無意識的観念 —— 「人間の中の第一義的で、創造的な「法廷」とみる

- ・無意識の存在は意識が活動を続けるためには不可欠。
- ・「無意識は意識にとって永遠に創造的な母親である」

3. 個人的無意識と集合的無意識

a. 個人的無意識：

- ・一人の人が一回的な人生のうちに作り出し、獲得した無意識。
- ・フロイトの言う無意識と同じで、個人の経験のうち忘却や抑圧のために意識から排除された内容からなる領域。
- ・個人が出生以来、経験し、考え、感じたものの中で、現在意識していないものが全て包含されている（意識化が可能な無意識）。

b. 集合的無意識（客観的な心）

- ・一つの全体としての**人類の心**の無意識。
- ・人類の生活の始まりから現在の状態に至るまでの無限の経験の貯蔵庫。人類全発展の痕跡がしるされている
- ・「人間一人一人の頭脳構造の中に繰り返し生まれてくる人類発展の巨大な精神的遺産」
- ・ここには創造性と破壊性が宿り、心の中心でそのバランスを保つ調整機構として「元型」なる自己を考えた

4. 心理療法の目的：「個性化」の過程を援助すること

- ・個人が無意識的イメージに直面しつつ自己の全体を統合していく過程。
- ・フロイトの自我の優位性の確立を超えて、自我を高次の全体性に向かわせ「自己」が人格の中心となる過程
- ・「人間は個性化が完成したとき、無意識と意識が平和に暮らし、互いに調和するときのみ、全体的、統合的、静かで幸福になる」
- ・自己の暗い影の側面との直面や統合を伴なう。

5. 元型

- ・「人類に先天的に備わっているイメージを作り出す潜在的パターン」
- ・集合的無意識に由来する普遍的なパターンで神話、伝説、おとぎ話の基本的内容。
- ・それ自体として現れることはないが、その作用は原型的イメージや夢を通して意識に現れる（例. ペルソナ、影、アニマ、アニムス、自己、大母、老賢者）。
- ・人間の成長をこの元型の連鎖として考える。

用語 **自己**（セルフ）：人格の中核。自我を超越する超個人的な力。全体性の元型。

元型：生物学的な行動パターンに呼応して機能する一般的、典型的な機能。

3. 人生脚本

I. フロイトとバーン

1. 人生脚本とは

- ・バーンは、人間は4, 5歳頃までに親から「お前は人生の舞台上で、こんな筋書きの芝居をこんな相手と演じて、こんな終幕を迎える」という脚本を手渡されると考えた。この人生脚本の分析の目的は人生を自らの統制のもとに置くことにある。

2. 反復強迫

- ・バーン：脚本はフロイトのいう**反復強迫**という防衛機制の結果である。
- ・バーン自身は脚本からの解放に悲観的（What Do You Say After You Say Hello?）。
- ・スタイナー, C.: 「バーンは失意の中で、早期の死を迎える人生脚本の下にあった」

反復強迫とは

1) 精神分析の過程

- ・幼児期体験を言葉ではなく行為として繰り返し再現する現象。
- ・分析操作に対する抵抗が多いほど、行為によって代理される。
- ・言語化できない抑圧された行為として表わしているであろう（フロイト）。

2) くり返される固定した行動パターンを表すのにも使われる

- ・子どもは生活の中で強い印象を受けた体験を、遊びの中で行動を繰り返す。
- ・初期のトラウマを解決するためにそのトラウマを再現するという試みを示す。

3) 苦しい体験を無意識のうちに繰り返してしまう傾向

- ・人生の過程で、苦痛で不快な過去の経験を何度も（強迫的に）繰り返す。
- ・その出来事を自分が作っているとは気づかず、それを不運や宿命のせいにする。
- ・反復は生活の中でのすべてのことにも転移され、行為の反復を本人も気づかない。
（例. 職業選択、結婚などの重要な決定など）

原因

- ・幼児期の体験が幼児に理解されなかった
- ・成長後も記憶として想起されない
- ・行為の中に強迫的に反復される

3. 脚本分析（バーン）

1) 脚本の公式：EPI → Pr → C → IB → Pay-off

早期の親の影響 → プログラム → 同意(決断) → 重要な行動 → 結末

2) 脚本マトリックス（禁止令）、脚本システム（ラケット・システム）

3) 脚本のタイプ

- ①勝者の脚本
- ②平凡な脚本
- ③敗者の脚本（悲劇的な脚本）

II. アドラー

1. バーン：「脚本分析はフロイト的と言われるが、実際は精神分析的でない」
「脚本分析に一番近い考え方をしているのはアドラーである」
 - ・ 目的論：人の心理的人生は、演劇の主役が途中の何幕かを演じることで終幕に潜む何らかのゴールを目指すのに似ている。
 - ・ バーン：人生脚本はアドラーの目的論を上回る点
 - ・ 人生プランはふつう無意識裡に行われるのではない。
 - ・ 個人に全責任があるというわけではない。
 - ・ アドラー理論よりもはるかに正確に予見できる。
2. 個人心理学への発展
 - ・ フロイトの原因論心理学から目標追求性理論さらに全体論的心理学へ。
 - ・ クライエントが社会的により有益なライフ・スタイルを採用するのを助ける。

人間理解の理論的特徴

- ・ 全体論：人間は、同じ目標に向かって協力し合う一つの統合体とみなす。
精神と身体、理性と感情、意識と無意識の要素の対立（内的葛藤）を認めない。
：カウンセリングでは初期から達成可能な目標の一致を重視する。
 - ・ 認知論：客観的事実よりも、それに対する主観的意味づけを重視する。
カウンセリング：推量と解釈投与（これはこういう意味かどうか確かめる）。
 - ・ 主観的決断能力の重視：人は自分の運命の主人公である。
 - ・ カウンセラーよりもクライエントの方が自分自身について知っている。
3. ネガティブな人生脚本：空想的優越の計画的利用
 - ・ 普通の人間と比較できないほど、人生目標・優越維持という指導的な線にしがみついて、空想的自己の地位にしがみついている人。
 - ・ 神経症的反応は、社会的関心の低さから生じ、さまざまな「遠ざけ」(distancing)のメカニズムによって表現される（劣等感に対する補償）。
例. 際限のない屈辱（マソキズム、形式交代）、病気への逃避（環境支配）
 - ・ 「精神異常は家庭不和のスケープ・ゴート」
 - ・ 「社会の要求についていけない人々が犯罪者」
 4. 教育現場、矯正施設の分野で短期療法として活用
 - ・ 治療技法（共同療法）：個人、カップル、家族、集団を2人以上のセラピストで扱う。
 - ・ グループ療法を中心技法として、個人療法や家族療法などの多彩な設定を使う。
 - ・ 積極的に助言を行う（例. 治者がクライエントに代って決断をしてやる）。
 - ・ 目標を追及するのは個人の全体であって部分ではない。
例. 問題児・甘やかされた子ども・発達の遅れた子らの教育の重視
 - ・ パーソナリティにおける文化的要因の重視。

Ⅲ. ユング

1. 個性化過程：ユングの心理学を理解するための鍵概念

ライフサイクル論

- ・人生を一日の太陽の運行になぞらえ**ライフサイクル論**を考えた。
- ・人間の一生を少年、成人前期、中年、老人の4つの時期に分ける。
- ・人生の最大の危機は前半から後半への移行する**中年期**である。
- ・人生の課題は個性化：前半で排除してきた自己を見つめ自己の中にとり入れる。

個性化

- ・各自のユニークな心理学的事実を、意識的に実現すること。
- ・自我を中心とした意識化のプロセス（いわゆる自己実現）とは異なる。
- ・個性化が心の中核としてのセルフの経験に導く。
- ・個性化の過程において自分の内部の世界との葛藤を計らなければならない。
- ・目標は個体としての人格発達にあるが、その展開には他者を必要とする。

2. ネガティブな人生脚本

a. 集合的無意識にまつわるもの：「影」の投影

- ・フロイト：「集合的無意識は人類発展史上の古物を保存している“一個の悪”」
- ・ユング：「人類共通の案じ方、考え方の型というものが存在する」
本能ならびに神話類型（人類の常に繰り返される諸体験の沈殿）の形で現れる。
- ・「影」：人格の無意識的部分で意識的自我が否定ないし無視する傾向がある態度。
- ・役割や働きが認識されない場合、個性化・自己実現にとって大きな危険物となる。
→ 観念が意識の舞台に躍り出ないようにする抵抗：「影」の**投影**
→ イマーゴ（仮像）：ある外的対象に投射された内的知覚の模像
例. 心の中の女性像・男性像（後述）

b. 心は自動調節的体系：人間の心理学的タイプ

- ・**外向型**：心のエネルギーが外の向う、興味や関心が外界の人や物に向かう。
- ・**内向型**：本来の現実是客户の世界より主体の中にある。
- ・タイプ理論の根底：客体に対する主体の関係→主体が人生行路をできるだけ確実に形成する（主体の側からの順応過程）

ユングの想定

- ・アドラー：内向型のみ扱う。権力衝動は個人を最も用心深く客体から守り、安全にしようとする。主体が絶対優位。
- ・フロイト：外向型のみ扱う。客体に対する欲望と客体との結びつきが最も大切。
- ・ユング：フロイトとアドラーの総合。補償の概念で両タイプを同時に認める。

3. 健全な人生脚本へ：無意識の意識化→劣等価値的態度の意識化（自己反省）

- ・外向型：過度に客体に結びつくことを止める。
- ・客体に対して関係を結ぶ。過度のためらいや思いわずらいを止める。

4. 男と女の交流

I. フロイト

1. エディプス・コンプレクス

- ・3歳から5歳くらいまでの子どもの男根期を通じて経験される三角関係の葛藤。
- ・この時期、異性の親を対象として愛する欲望が頂点に達する。
- ・その結果、異性の親が実際に愛している相手のある同性の親に対する強い敵対感情が生じる
- ・両親へのエディプスの感情は、対象関係の中で関わり結びつく能力を伴った、十分な自我発達の契機を印象づける

神話

- ・この概念の基本的要素を記述するために、フロイトはエディプス王の神話を利用した。
- ・本来の物語では、エディプスは自分の出生を探るうちに、母と恋に落ち父を殺す。
- ・ソフォクレスは個人の悲劇だけでなく、人類全体の悲劇を描くためにこの神話を用いた。
- ・フロイトはこの両方の局面を照らし出した。

2. エディプス・コンプレクスの解決

- ・男児：父親による去勢の脅威を知覚することで解決される。
 去勢恐怖によって母親に対する近親相姦願望を断念する。
- ・女児：発達自体、愛情対象をもともと愛情を抱いていた母親から父親へと切り替えることを含んでいる。
- ・自分にペニスがないことを認知する中で頂点に達する（**ペニス羨望**）。
 - ・母親がモデルになるような自分の補償能力についての自覚が生まれてくる。
- ・解決の頃に子どもは明らかに禁止やタブーの内在化によって超自我が形成される。
 - ・この時期にエディプス願望を抑圧すると後に不合理な罪悪感の源をつくる。
- ・青年期：葛藤は青年期を通じて再現・解決する。
 - ・核家族の外にいる誰かを、性器的愛情関係の中で愛情の対象として選択できるとき。

3. ネガティブな脚本に影響するエディプス期に形成される性格特徴

- 出しゃばりで強気一方：積極的、男らしさが誇張された状態（負けん気）。
 - ・女子：勝気で男まさり（男根羨望を暗示）
- 気が小さくて引っ込み思案（女らしさの誇張、男性にも少なくない）
 - ・エディプス願望の表出を危険と感じて、しり込みし、依存的、受け身的になる
- 男性に特有な去勢不安、女性に特有な男性憎悪、超自我形成など
- エディプス葛藤と甘え
 - ・乳幼児期に十分に甘えられた人・・・・・・エディプス葛藤希薄
 - ・十分に甘えられず、依存関係が濃厚な人・・・・・・エディプス傾向露骨

II. アドラー

目標追求の無意識的前提

- ・人間関係はいかなる場合にも、優越をめざしての闘争である。
- ・女性は男性に比して劣等であり、その反応、男性的な力の尺度として奉仕する。

1. 性欲の役割

- ・男性的・女性的・上位・下位という図式と密接に関連する。

エディプス・コンプレクス

- ・多くの場合、男性的な権力意識が超性欲的な形式をとっているという比喻。
- ・母親を自分に服従させ、父親をうち負かそうとする弱い立場の小児が両親に対する劣等感から親に対して権力闘争を試みたものにほかならない。
- ・両親に対する優越的地位を子供に確保してくれるもの。

2. 男性的抗議

- ・人間はすべて優越の立場に立とうという目標の下で動いている。
- ・女性が男性の力を得ようと努力することによって、劣等感に打ち勝とうとする補償的プロセスを表す。
- ・男性：自分の男性という性の方が女性という性よりも優れていると思っている。
- ・女性：男性への羨望。またそこから生じ優越性獲得の志向。

3. 女性の劣等感

- ・初期の社会化や社会による役割の限定から生じたもので、生来の生物学的劣等性から生じるものではない。
- ・女性にはペニスがないという認識から生じる羨望、そこからさらに自分たちは男性に比して劣等であるとする（ペニス羨望）。
- ・女性においても男性的な感情の動きがあり、男性においても女性的な衝動がある。

4. ネガティブな脚本に向かって

- ・普通の人間と比較できないほど、人生目標・優越維持という指導的な線にしがみついて、空想的自己の地位にしがみついている人
- 例. 男尊女卑、DV、退職後に妻より離婚を迫られる夫

形式交代

- ・支配欲と反抗によっては自分の意志を貫くことができないと悟る。
- ・代わりに頼りなさや弱さ（マソキズム・女性感情）を手段として自分の願望を満たす。

追記

- ・アドラーは男女平等や協調的生活について男女の教育の必要性を説いた。
- ・「個人心理学」の目的：クライアントが社会的により有益なライフ・スタイルを採用するのを助けること。

Ⅲ. ユング

1. アニマ・アニムス

理論的背景（ユング）

・人間の心には思考と感情、知覚と直観の2組が対置している。

男性：思考と知覚（ロゴス原理）がふつうは意識にあり、感情と直感（エロス原理）は抑圧されている。

・意識的には男性的役割を演じていくが、無意識の中には女性的性質がある。

・内部に女性のイメージを持っており、その古態型をアニマと呼ぶ。

女性：意識には感情と直感（エロス原理）が前景にある。

・抑圧された思考と知覚（ロゴス原理）とは無意識にある。

無意識に男性像をもち、その古態型がアニムスである。

2. アニマの役割（林）

・あらゆる男性の中に存在し、女性の中のアニムスに対応する仕方で集合的無意識の中の主要な元型を形づくっている。

・男性においては抑圧され、未発達のまま無意識の中に留まっていることが多い。

・「無意識の世界へのガイド」：今まで無視・軽蔑してきた世界に目を向けさせる。

・他者とのコミュニケーションや感情、特に愛の関係を可能にする。

・心の全体性と幸福に対して否定的で破壊的であるか、肯定的な貢献をするかのいずれかの潜在的可能性を持っている。

3. アニムスの役割（林）

・客観的、合理的、論理的に物事を認識する能力を形成していく。

・男女の価値が確然と区別された時代では、夢や空想の中で男性的な人物や動物の姿で現れる。

・女性を母から独立させ、男性とのエロスの関係を可能にさせる。

・一個の個性的な人格として成長するきっかけを与える。

4. 男と女のネガティブな交流

1) アニマの投影（アニマとの同一化）：一人の女性の姿における人格化

・女々しい感情反応：気まぐれ、女性化、感傷癖など（原始的状態のアニマ）。

・非常に知的な男性が娼婦型の女性に惹かれて転落の道をたどる。

・多くの恋愛関係の破綻。

2) アニムスとの同一化：複数の男性の姿における人格化

・女性を硬化させ、自説をまげぬ議論好きに仕立てる。

・自己の意見が普遍的真理であると主張してやまない（高橋：「女の片意地」）。

・大母：ネガティブな面こそ男性をして、より男らしさを強調させる因子ともなる。

なぜ男女ともアニマ・アニムスの投影を意識しなければならないのか？

5. 夢の意義

I. フロイト（土居）

1. 夢の機能: 「夢は性的な本性を持った願望充足である」それは意識によって抑圧されているが夢の象徴性を通じて偽装された形で意識に‘委ね’られる。
 - ・睡眠中に起きる一種の表象作用（現在の瞬間に知覚してはいない事物や現象について、心に描く像）
 - ・夢は睡眠を保護する……“悪夢”は？
2. 夢の特質：現実から一時逃避する目的に適った精神活動
 - a. 覚醒時の知覚と現実的思考とは全く異なる別種の精神活動。
 - b. 夢の世界は主として視覚像からなる。
 - ・病的な精神過程にきわめて類似しており、本質的に同一のものと考えられる。
3. 夢の思考過程
 - a. 夢の検閲：不道德な欲望の表現を緩和または隠蔽する。
 - b. 第二操作：でき上がった夢にまとまった格好をつける。
 - c. 夢の不分明さ：非現実性、非論理性に関連
 - ① 圧縮：いくつかの映像があわさっている
 - ② 置き換え：事柄が間接に関係する別のことを暗示している
 - ③ 象徴：夢の中のある種の映像が現実世界の何か特定の表象を代表している

まとめ

- ・夢の潜在思考：こうして得られた夢の意味は夢主の心中深く隠れた欲望とそれに関する葛藤を現わしている。
 - ・素材としての夢：表現内容
 - ・圧縮、置き換えの意味：いかなる映像ももし心中の本能的欲求またはそれに関する葛藤を表現し得るものならば、それは相互に交換し得る。
 - ・夢の思考過程の主要な部分は一次過程から成っている。
 - ・一次過程：無意識的で原始的な思考。乳児の幻覚的満足の経験。
4. 夢の解釈と無意識
 - ・夢の解釈：表現内容から遡って潜在思考を探り出すこと。方法：自由連想法
 - ・一次過程と二次過程を境とする抑圧をある程度排除する、次に一次過程に放逐されている本能的欲求を二次過程の中に包み込む。
 - ・解釈の困難さ
 - ① 抑圧による内的抵抗
 - ② 夢の背後の欲求・思考・感情が決して一義的ではない（多元決定）
- フロイト 「夢の解釈は精神の無意識的活動の知識に至る素晴らしい道である」
「夢は過ぎ去った幼児の精神生活の一片でもある」

II. アドラー

1. 夢の機能

- ・「夢は人間が権力衝動と空想優越とを保持するのを助ける」一措置である。
- ・夢の世界は空想・権力目標があからさまな姿を現す。
- ・夢は願望充足よりも問題解決への努力と、現今の問題に対する解決策を現わしている。
- ・権力欲求充足という目的のための保身の試み。
- ・夢主の安全保身の傾向を援護する。
- ・夢は一つのフィクション（**空想的生活目標**）。

この空想を借りて覚醒生活において**自己の優位**を自他に証明できる手段をあれこれ試している

2. 夢の特徴

- ・夢はただ暗示しか与えていない。
- ・明瞭な未来像を示すことはできず、ただ「道はどの方向へと走っているか」を示すにとどまる。
- ・無意識的欲求と病的発展の2つを目的的に規定している。
- ・目的的な性格は認めているが、意識のネガティブな諸傾向を維持確保するという意味においてに過ぎない。
- ・目前の問題に対してとっている感情的態度をあからさまに示す。
- ・夢主の空想的生活目標によって割り出された諸困難を避けるための口実を示す。

3. 夢の思考過程

・夢の検閲

男性的指導線と、夢によって意図された自制との間のズレを覆い隠すために行う。

・夢の不分明さ

夢の本音と人生や現実との間の距離を曖昧にぼかすためには、夢の本当の内容を歪曲することが必要となる

・幼児的状況の活用：

幼少時に、子どもはその時々の問題をできるだけ簡略な方式で簡略化しようと努力する。そこで将来の全発達にとって使用可能な神経症的な図式が作られる。人は夢のこの図式をもう一度利用する。

まとめ

- ・アドラーは夢を実現させてはならないネガティブな衝動として歓迎していない（？）
- ・しかし病気の正体をはっきりさせるという意味では貴重な内容を明らかにしている。

Ⅲ. ユング

1. 夢とは

- ・「象徴的形式における無意識の活動状態の自発的な自己表現」
- ・「意識がその真相と存在とを全然認めようとしないうような、或はいやいやながら認めるような、その人の**内的状況**を示す」

2. 夢の特徴

象徴

- ・本質的に未知の何ものかの、可能な最良な表現。
- ・心は象徴形成の能力を持つ。象徴は心の表現の自然な様式である。
- ・象徴は無意識的な過程が意識的になるための水路である。
- ・象徴はエネルギーを変化させる一個の心的機械である。
- ・精神的発展の古い残存物が夢の中に現れてくる形式＝象徴。

象徴の機能（象徴的思考は右脳思考）

- ・象徴形成の超越機能によって内的な心の資源を動員する（エネルギー変圧器）。
- ・無意識と意識を一つの統合へと結合する能力。
- ・より大きな統合と**個性化**に向かう。

3. 夢の機能

- ・もともと一つの正常な機能である。それが抑圧・屈折されているにすぎない。
- ・「意識が頑張ってもどうにもならない時に、解決をもたらしてくれるもの」
- ・「人間として生きていること」の根本的な諸事実を再び教え押し示してくれる。
- ・「われわれは何よりもまず、専らわれわれ自身の夢をみるものだ」
- ・フロイト的な夢の検閲はない。
- ・夢主の人生の中で**個性化**の過程とどうかかわっているか（ホール）。
- ・補償的機能の他に未来を形成していく機能もある。

4. 夢の解釈（ホール）

a. フロイト的還元的方法（個人的無意識を対象とする1部分にすぎない）

b. ユング派の夢解釈

1) 夢の詳細をはっきり理解する

- ・上手に病歴を取ることに似ている。

例. カメの夢

2) イメージの拡充

- ・個人、文化、元型のうち、1つかそれ以上のレベルで順を追って連想をとる。

例. ・夢主の知り合い ・赤信号 or 白 ・民話、おとぎ話、神話

3) 夢の文脈

- ・拡充された夢を、夢主の生活状況と**個性化**のプロセスの文脈で考える。

文献

フロイト

- 小此木啓吾：フロイト．講談社，1978
小此木啓吾：現代精神分析の基礎理論．弘文堂，1985
小此木啓吾ら編：精神分析セミナー I－III．岩崎学術出版社，1981-3
牛島定信編：フロイト入門．(こころの科学 61 巻)．評論社，1995
西園昌久：精神分析を語る．岩崎学術出版社，1985
西園昌久：精神分析治療の進歩．金剛出版，1988
前田重治：図解 臨床精神分析学．誠信書房，1985
前田重治・小川捷之編：精神分析を学ぶ．有斐閣選書，

アドラー

- 岩井俊憲：人生が大きく変わるアドラー心理学入門．かんき出版，2014
岩井俊憲・星井博文・深森あき：マンガでやさしくわかるアドラー心理学 1，2．
日本能率協会マネジメントセンター協会，2014
桑原晃弥：THE ONE MINUTE ADLER 1 分間アドラー．SB クリエイティブ株式会社
アレックス・L.チュウ (岡野守也訳)：アドラー心理学への招待．金子書房
G. J. マナスター他編 (柿内邦博・井原文子・野田俊作訳)：アドラーの思い出，創元社
エドワード・ホフマン (岸見一郎訳)：アドラーの生涯．金子書房
A. アドラー (高尾利数訳) 人生の意味の心理学．春秋社，1980
野田俊作：アドラー派療法 (氏原 寛・成田善弘編：カウンセリングと精神療法 8 章，
pp. 203-209)．培風館，1999

ユング

- 河合隼雄：ユング心理学入門．培風館，1967
秋山さと子：ユングの心理学．講談社現代新書，1982
樋口和彦：ユング心理学の世界．創元社，1978
河野博臣：生と死の心理－ユング心理学と心身症．創元社，1977
山中泰裕：臨床心理学入門．PHP 新書，1996
大住 誠：ユング派カウンセリング入門．筑摩書房，2003
河合隼雄・樋口和彦・小川捷之編：ユング心理学・東と西の出会い．新曜社，1984
ジェームズ・A・ホール(氏原 寛・片岡 康訳)：ユング派の夢解釈．創元社，1985
C. G. ユング (松代洋一・渡辺 学訳)：自我と無意識．第三文明社，1995
高橋義孝：無意識の発見．光書房刊，1959
横山 博：ユング派－チューリッヒ派 (氏原 寛・成田義弘編：カウンセリングと精神療法
5 章、pp.99-115)．培風館、1999